

伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



かな
金

づち
槌

たかのよしはる
高野由治

(平成4年度作品)
16mm映画・ビデオ
カラー・16分

プロフィール

住所、荒川3-66-9。

大正元年(1912)、新潟県生まれ。

平成3年度、荒川区指定無形文化財保持者に認定される。

12歳のとき、台東区の栗山仁三郎氏に弟子入りして以来、70年近く、昔ながらの手法で金槌づくりに励んでいる。板金用金槌・鋳工用金槌、彫刻槌など注文により作っている。

こしらえる金槌の種類は約50種。長いものは、3寸4分(約10センチ)の板金用、鋳工用の金槌がある。小さいものは、3分(約1センチ)で金属彫刻を細工するときに使われる彫刻槌で、別名、お多福といわれる。

「気持ちが入らないような仕事はしたくない。精魂尽きたらおしまいです。腕はあがっちゃいない、まだこれからですよ」と語る高野さんは街の鍛冶屋さん。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

用具・工具

床箸^{そこばし}、^や箭、^は箭げん台、金槌、金床、火床、水桶、ヤスリ各種類、石炭の粉、食用油。

工程——板金槌と彫刻槌の場合

- (1) 火床で鋼を赤く熱し、床箸ではさみ出し、金床の上で金槌を使って打ち鍛えていく。この工程を何回も繰り返す（彫刻槌の場合は、熱した鋼を金床の上で二つに割って、二本分をつくる）。
- (2) 石炭の粉をまぶして、箭と呼ぶ耳打ちがくっつかないようにして鋼に柄の穴をあける。
- (3) 角ヤスリ、平ヤスリ、小丸ヤスリなど五種類のヤスリを使って磨く。
- (4) 紙ヤスリで「鏡」と呼ばれる、槌が当る面を磨く。
- (5) 柄を差し込む「こぐち」を入念に磨く。
- (6) 焼き入れ（焼いた槌を水の中へ入れる——湯玉がとび散り、金槌に生命が宿る一瞬である）。
- (7) 仕上げ磨き。
- (8) 総仕上げ（食用油を敷いて磨き上げる）。



カラカミ槌と彫刻槌

利用される方は ☎ **3891-4349**

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区立荒川図書館で貸し出しています。貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。